東日本大震災　十年目の「わたしの一句」
千人の生きた証し
日本現代詩歌文学館 館長 高野ムツオさんに聞く

聞き手・村井　康典

宮城県俳句協会は二〇二一年三月に東日本大震災から十年を迎えるのを機に、震災をテーマとした俳句を募集した。二〇二〇年一二月の応募締切までに全国から一一八三句が寄せられ、「十年目の今、東日本大震災句集わたしの一句」として句集にまとめられる予定だ。二〇一三年の最初の句集、二〇一六年の五年目の句集に続く三冊目となる。

集まった作品はそのまま震災十年の証言であり、未来へのメッセージでもある。俳句に詠まれた心情、体験のひとつひとつは重い。俳句は震災といかに向き合ったか、人々はなぜ震災を詠み続けるのか。「わたしの一句」への参加を呼びかけた宮城県俳句協会会長で日本現代詩歌文学館（岩手県北上市）館長の俳人高野ムツオ氏にうかがった。

Q「わたしの一句」を始められたきっかけは。

高野氏　震災の二カ月後に河北新報の俳壇が復活しました。すると震災に関する俳句があふれていたんですね。震災をテーマにしたり、震災をきっかけにして俳句を作ろうと思った人が私だけではなくて、たくさんいらっしゃることに気づいたのです。

二つ目は、雑誌や句集で発表の機会がある専門俳人とは違って、多くの人々の作品は後まで残らずたくさんの方々に読んでもらう機会がありません。震災を契機として詠んだ思いを一冊にできたらと思ったのです。

そこで宮城県俳句協会でやろうと役員会で提案しました。四つの俳句協会（現代俳句協会、俳人協会、日本伝統俳句協会、国際俳句交流協会）や、結社などに所属していなくとも誰もが参加できる、誰もが自分の一句を残す場を設けようと考え、全国に呼びかけました。最初はどのくらい集まるか心配だったのですが、最初の募集（震災三年目）には結果的に全国から一二六一句が寄せられました。予想以上でした。

実は、俳句は大震災など異常なことを詠むものではない、そしてその前には戦争という社会的なことを詠むものではないという考え方が俳壇でも主流でした。自然と一体となりながら自然の豊かなところ、よいところを受け止めて詠むものだと。9・11米国中枢同時テロが起きたとき、短歌はたくさんうたわれましたが、俳句はほとんどつくられなかった。微々たるものでした。阪神淡路大震災で俳人はいくらか反応してよい作品を残しましたが、神戸とか大阪近辺の人たちの地域限定でした。

東日本大震災では未曾有の被害の中で俳句なんて悠長なことをやっている状況はないのではないか、もっとボランティアをやったり自分の生活を立て直すことが優先されるのではないか、初めて俳句を募集した二〇一三年は一息ついた時期とはいえ、俳句をつくっている方はどれほどいらっしゃるだろうかという思いがありました。ところが、これほど多くの人が送ってくれたのです。震災があってもなくても今生きている社会とか、人間の生活とか、そういうものを大事にして詠おうと思っている人が少なからず存在していると私は感じています。

最初の句集はやはり生々しい俳句が多いです。その後、二〇一六年の「五年目の今、わたしの一句」には七七四句が集まりました。時間の

経過を感じられる俳句も多くなりました。たとえば「五年目のもう海見えぬ春景色」（仙台・鹿目勘六さん）という俳句は、一年ごとに海辺の風景が変わっていく。防潮堤ができて今まで見えていた海が見えなくなって寂しい。しかし春景色があふれていてほっとするという内容です。こういう俳句はやはり五年目だからできたのだと思います。

Q　「十年目の今、わたしの一句」募集の呼びかけに、高野さんのこういう一節があります。「十年の節目を俳句の力で掬いあげ、震災を風化させることなく未来へ伝えるために」。俳句の力とはどんなものでしょう。

高野氏　さまざまな言葉の表現形式がありますが、俳句は一番逆説的というか、矛盾した形式なんですね。どういうことかというと、俳句はたった十七音しかありません。だから「語らないで語ろう」ということです。ヨーロッパで詩を書いている人、ヨーロッパの詩に関心のある人はびっくりします。長く書き続けることによって自分の思いが伝わるというのが、古くからの詩の前提条件だからです。ところが俳句は真逆です。語らないんですから。語らないで自分の思いをそこに込めようという、奇跡的な表現形式です。

恐らく、その形式だからこそ俳句は今回の大震災で力を発揮することができたと思います。つまり、これまであったことがないような未曾有の事態、言葉に尽くせない苦しみや悲しみ、この先どうなるか分からない不安感。それを直接言うのではなく、一瞬の映像であるとか、季語であるとか、一言に託すことによって俳句は皆さんに伝えることができました。それを「沈黙の力」と言ってもいいでしょう。言葉の中にこもった沈黙によって逆に、無言のうちに心と心を繋ぐことができました。そうした俳句の力を再確認しました。

俳句の力とは、その人の表現能力以上に、俳句という器の力でもあると思います。俳句がたまたま肉体を通して言葉を発信させただけであって、いろんなことを表現させる力が五七五というたった十七音にこもっていた。しかも、時がたてば古びてしまうはずの言葉ですが、俳句の場合は、そのときそのときの時代、新しい言葉に即応しながら人間の気持ちを掬いあげています。それは個人の力ではなくて、俳句という器そのものの力だと思います。

Q　それが、人々が俳句を詠み続ける意味でしょうか。

高野氏　人間の生命は有限ですから、十歳のときは十歳の俳句、六十歳のときは六十歳の俳句、八十歳のときは八十歳の俳句しかできないんですよ。同じ雪を見ても感じる美しさはそれぞれ違います。二十代で結婚するときに見た雪の美しさと、退職の六十歳で見た雪の美しさ、まもなく自分が人生を終えるであろう九十歳が見た雪の美しさは全然違います。それを直接言うのではなく、光や影やそのとき出会った物を通じて十七音に託して表現できるのです。年をいくら取っても俳句に飽きないんですね。

Q　高野さんご自身も大震災当日から震災を詠み続けているのですね。

高野氏　あの日、仙台から多賀城の自宅まで（約十三キロ）歩いて帰ったのですが、こんなときに人でなしだなと思いながらも俳句をつくっていました。俳句は十七音と短いから歩きながらも作ることができます。荷物で両手がふさがっても覚えることができます。なおかつ、あたりの状況を見ながら言葉で形に留めることができました。これは詩ではできません。和合亮一さん（福島生まれの詩人。詩集『詩の礫（つぶて）』など）が先駆けて発信できたのは、ツイッターでほんの短い言葉でやれたからですね。あれも短さの力だと思います。俳句はもともとそういう力を持っています。

なぜ震災のときから俳句をつくり続けているのですか、なぜできたのですかと、よく聞かれます。その理由として、私の先生の佐藤鬼房（岩手県生まれ）は、病気と必死に闘っている時にいい俳句をつくったとか、かつての社会性俳句は社会的に厳しい状況を表現したので、同じような危機でこそ詠うのが俳句だとか、いろいろ考えました。結局最後に行き着いたのは、あのとき言葉を発することによって、自分がそのときそこで生きていたんだということを確認するためだったということでした。俳句にすることで、あのとき自分は何を考えていたのか、何を感じていたのか確認しているのです。自分が今できることはせめてその時々の瞬間の思いを俳句に託すことだけだと思います。

Q　そうしてつくられた俳句は多くの人々に受け止められています。日本人にはもともと共感力が備わっているのでしょうか。

高野氏　必ずではありませんが、季語の力も大きいです。俳句が日本で育って普及し、それを共有できるというのは、春夏秋冬という季節の循環するサイクルで生きている、しかもそこで育てられた文化を享受しているという共通感覚があるからです。共通感覚をたくわえている言葉が発信されると、ああそうか、この世界は私がいつか感じたこととよく似ているな、と思うわけです。人は自分の体験に合わせて共感するのです。微妙な違いがあるかもしれないが、小さな差異は鑑賞の妨げにはなりません。

震災が起きて、ある意味では言葉、とくに季語の意味が変わってきました。たとえば、あのとき「春の雪」で俳句をつくった人たちは、今までになかった恐怖感、美しくても恐ろしさを伴った美しさを感じた雪だったのです。それまでの「春の雪」といえば、寒い冬も終わった、花も咲くいい季節になるよという期待感のみを伴った言葉でした。だが、震災を契機に不安感や恐れという意味も、実は「春の雪」には加わっていたんだということを発見しました。言葉の世界が広がったのです。「桃の花」も女の子の未来を愛でる、健康を祈る花のはずなんですが、照井翠さん（岩手県生まれ）の「双子なら同じ死顔桃の花」では悲しみを象徴するものとなっています。幼い子どもが一緒に亡くなるというのは、何か大変なことが起きたからです。ここでも言葉の意味が変わっています。

佐藤通雅さん（岩手県生まれ）という歌人は、大震災の放射能事故は「季語を凌辱した」と言いました。たとえば「新米」という喜びにあふれた言葉が、その後は不安を含む言葉となりました。その通りではありますが、むしろ「新米」という季語が人間のマイナスの意味合いも帯びることによって、結果的に季語の力が深まったと私は思いたい。

私は「東日本大震災の日」を新たな季語として立項するよう、ある歳時記に提案しています。「震災忌」「震災記念日」という季語はありますが、これは関東大震災を指します。阪神淡路大震災では「関西震災忌」「阪神淡路震災忌」という季語が生まれました。もっとも、無理にこうした季語を使わなくても東日本大震災ではいい句がたくさんつくられています。

Q　今は新型コロナウイルスの渦中にいます。俳句はどのように向き合うべきでしょう。

高野氏　震災もそうですが、意図的に感染とかウイルスという言葉を用いる必要はありません。コロナウイルスへの不安感は、必ず目の前の映像とか言葉の世界に反映されます。それを素直に詠えばいい。それが結果的にコロナウイルスの時代を普遍的に反映した俳句になるでしょう。「目に見えない恐怖」に対する社会の諸相、個々の不安感、孤

独感の深まりを言葉に託すことが、コロナウイルス時代を表現することにつながるでしょう。生きている場で構えず、しかし目を逸らすことなく作ることです。自分の生きようも表現することになります。

高野　ムツオ氏（たかの・むつお）一九四七（昭和二二）年宮城県生まれ。阿部みどり女、金子兜太、佐藤鬼房に師事。二〇〇二（平成一四）年、鬼房より俳誌「小熊座」主宰継承。句集『萬の翅』で読売文学賞、蛇笏賞、小野市詩歌文学賞受賞。今年度、河北文化賞。そのほかの句集に『陽炎の家』『蟲の王』『片翅』など、著書に『語り継ぐいのちの俳句』『鑑賞　季語の時空』など。日本現代詩歌文学館館長。

高野ムツオ氏の自選十句。

『萬の翅』より　（二〇一三年一一月、KADOKAWA）

二〇一一年作

四肢へ地震（ない）ただ轟轟（ごうごう）と轟轟と

膨れ這い捲（めく）れ攫（さら）えり大津波

春光の泥ことごとく死者の声

車にも仰臥（ぎょうが）という死春の月

泥かぶるたびに角組（つのぐ）み光る蘆（あし）

瓦礫（がれき）みな人間のもの犬ふぐり

陽炎（かげろう）より手が出て握り飯摑む

みちのくの今年の桜すべて供花

二〇一二年作

靴を鳴らして魂帰れ春野道

『片翅』より　（二〇一六年一〇月、巴書林）

二〇一三年作

死者二万餅は焼かれて脹（ふく）れ出す

俳句の沈黙の力と共感力

【インタビューを終えて】印象的だったのが高野氏の「沈黙の力」という言葉だ。東日本大震災は筆舌に尽くしがたい災禍だった。言葉をどれほど費やしても言い尽くせない悲しみ、苦しみ、怒り…。あふれ続けるあらゆる感情や場面を、たった十七音の俳句が表現した。

炊き出しや余震にゆるる蜆汁

陸に灼ける鉄骨海にはされかうべ

卒業子「天を恨まず」と言ふ答辞

名札無き柩の上に梅一枝

「フクシマ」にあらず「福島」秋刀魚焼く

二〇一三年の最初の句集「わたしの一句」から。震災から三年目に募集した俳句は、少しは時間の経過を感じられるが、震災の衝撃と慟哭が続いている作品が目立つ。

それが震災五年目の二〇一六年の句集では、復興がすこしずつ進み、生活もわずかながら取り戻しつつある空気が読み取れる。ただし、行方不明者はいまだ多く、原発事故で大規模避難を余儀なくされた福島では時間が止まったままだ。

復興の烏賊釣船や出港す

春空へ復興成りし社旗上がる

戻り来し牡蠣剥き小屋に女ごゑ

鎮魂の海初蝶の行方知れず

除染土の山ひまわりの丈を越え

高野氏は、俳句とは「瞬間を切り取る詩」だという。瞬間を言葉に託すことによって俳句は成立する。十年目の今回もたくさんの瞬間が寄せられた。

世界で最も短い詩＝俳句を人々が受け止められるのは、共感力があってこそ。同じ土台として四季の循環の中で生きる日本の人々が言葉を通して追体験できるのは、それぞれが記憶の底から同じような経験や感覚を引っ張り出して目の前の作品と対峙できるからだ。

災害の時代。共感力が今ほど大切なときはない。言い換えれば「他人事ではない」という意識と言ってもいいだろう。災害時に他人を思いやること、それ以上にこの列島では自らの身の上にいつ起きても不思議ではない災害に備えることでもある。

日本現代詩歌文学館 館長　高野ムツオ氏